

もくじ
 白流大権現 1P 千住掃部宿の「旧書留」から④ 2P
 伝統と保存の技術Ⅱ 表具師 勝村真光 3P



足立史談

第589号

2017年3月15日

足立区教育委員会
 足立史談編集局
 足立区立郷土博物館内
 〒120-0001
 東京都足立区大谷田5-20-1
 TEL 03-3620-9393
 FAX 03-5697-6562
 (28-308)

白流大権現 —保木間の屋敷神の一例—

奥村 麻由美

■屋敷神と白流権現 白流大権現は保木間二丁目の國井孝保家で江戸時代より祀られていた屋敷神（やしきがみ）である。
 屋敷神とは名の通り一族や血縁者、またごく近隣の住民で信仰する小規模な氏神で、民間信仰の一種である。

一般的には屋敷の敷地内一角に小さな社や祠が立ち、一家で祀っているものを目にすることが多いが、一軒の家の屋敷神の枠を越え、地域の人々に信仰されているものも存在する。また家が長い年月の中で途絶えても、地域の神社の摂社などに配されて残る場合や、そのまま独立した神社になることもある。

この白流大権現について、付属する「白流大権現縁記」によれば、勸請時は分家を含めた周辺の國井一族で祀っていたようだが、徐々に広がり、後世では同族だけの屋敷神ではなくなっている。親戚関係は不明であるという同じ國井という名字の家々や近隣の家々、三十軒近くを氏子とした信仰・祭祀へと変わっており、屋敷神としては比較的規模の大きいものであるといえるだろう。屋

敷神の変化をたどるプロセスの比較対象としても面白い例である。なお、このような屋敷神の変化は地域的特徴や逸話、時代背景の必需によるもので、必ずしも社格・神格による規模差ではない。

■いわれと祭り 白流大権現のいわれについては、付近の洪水で流れていた白蛇を天明八年（一七八八）の九月十五日に、竹塚の延命寺の法要にて勧請したのが始まりだという。

神道色を帯びながら、寺院による祭式が行われている点に、かつて神仏集合で、神社の区別がゆるやかであった時代の名残もうかがえる。幾度か鎮座地の移転があったというが、創建当時からあると思しき棟札にはかろうじて「天明」の文字が読み取れる。

平成十六年までは十月（旧暦の九月）十四日前後に祭祀を行っていたとい、無病息災等を祈願し、社旗を立て、太鼓を打ち、近所の子供たちに菓子配るなどしていた。祭祀に携わった國井家代々の関係者名簿や大正十三年からの集金簿なども残されている。

■蛇と水神の信仰 蛇または竜神



創建当時のものとおぼしき棟札

は、水に関係した信仰の象徴である。稲作を中心とする日本人の生活には、豊かな水は欠かせなかった。しかし水は少なれば干ばつ、多ければ水害をもたらし、畏怖される存在でもある。そのため全国において水に対する様々なかたちの信仰がみられた。

なかでも足立区周辺は中川、綾瀬川、隅田川など水源となる河川があり、また水はけの悪い土地が多い。それゆえにたびたび洪水などの水禍に見まわれており、水害の記録や関係した民話などが多く残る。区内には水神としての性質が強い氷川神社が各地にあることもあり、水神の数はさほど多くないが、「蛇橋」に代表されるように、蛇と水を結びつけた伝説や神社に、荒れ水を治めることに苦心していた土地柄が見えてくる。(※蛇橋：花畑にあった綾瀬川に掛かる橋。江戸時代に名主新八が洪水から村を救うため堤防を切ろうとして、下流の村民から襲撃され命を落とし、大蛇になったという区内に残る民話。)

*** ** *

平成二十七年(二〇一五)年、勸請時と同じ延命寺の当代住職により、細雨の中、御霊抜きの祭式が執り行われた。その後、当館へ社の神具一式の他、起源のいわれや社旗、祭事の太鼓、帳面などが寄贈された。屋敷神のかたちを知る上で貴重な資料群である。

(郷土博物館専門員)

千住掃部宿の「旧書留」から④

河川と用水路

多田 文夫

土地の記述に続いて低地帯らしく河川や堤防、また千住の農村としての基盤になる用水についての記述が登場する。

■ 積文

【①河川関連】

(5丁表) (づき)

川原繩手長九拾間右繩手之内二

石橋 長壹間 敷石十三枚 式ヶ所同断

中三間 石垣高三尺

荒川 長九百五拾間 川上本木村より

中平均百五十間 川下橋場迄

【②用水関連】

樋七ヶ所

東掃部堀

中壹間

千本松より水戸海道庚申橋迄

長四百四十間

(5丁裏)

西掃部堀

中四尺

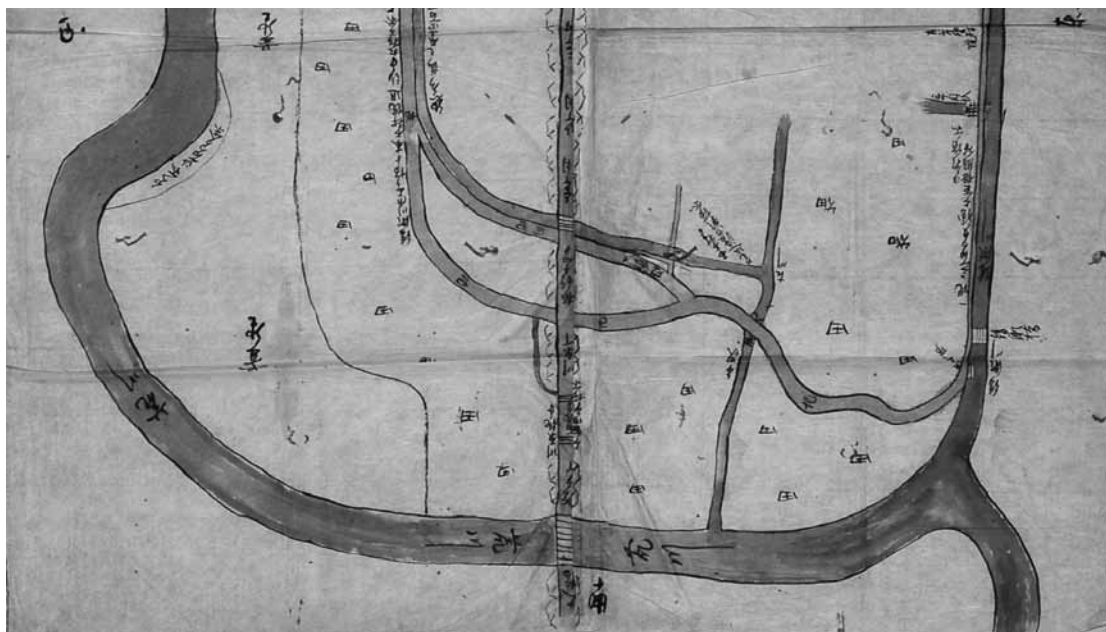
五丁目新宮前より箱塚迄

長五百間 新宮前より五町目右迄

長式百六拾間

西悪水堀

掃部堤塚より荒川端迄
式百九拾五間、
東壹町目より中耕地石橋迄
長百六拾五間



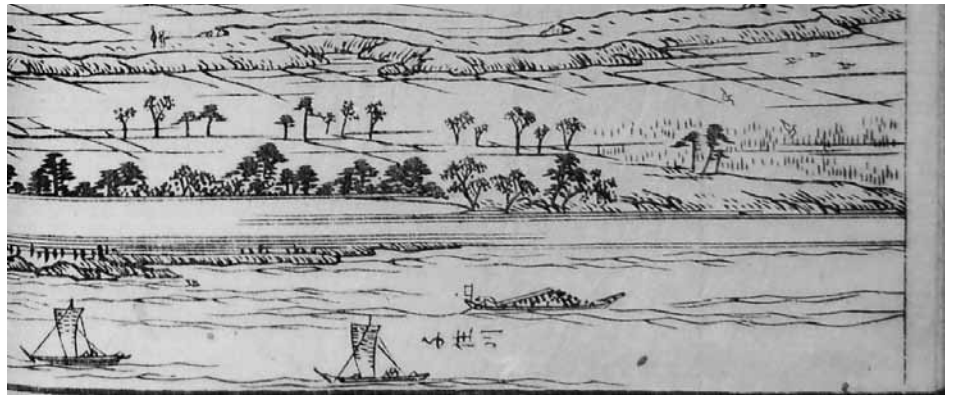
写真中央下が千住大橋 大橋の上流二箇所と下流に「荒川」の文字が見える。郷土博物館蔵高田家文書の絵図(以下「高田家絵図」と略す)より。

解題7 河川・用水記事

【①河川関連】「川原繩手」とは、

日光街道の千住河原町と千住橋戸町の間にあった高上げ道路のことである。現在は平坦に見えるが河原町と橋戸町の間は低湿地帯があり、日光道中は高上げされた土手上を通っていた(のちに新開橋が河原町と橋戸町間に建設された)。

続く荒川は現隅田川のことである。当時の明細帳などではおおむね「荒川」と表記される。「絵本江戸土産」や「江戸名所図会」等江戸時代の地誌類では、ほかに千住川という表記も散見する。江戸時代の河川名称は、一つの流路で様々な表記が用いられることが一般的であった。足立区周辺だと千住川、荒川という表現があり、綾瀬川との合流点を超えて下流になると、浅草川、隅田川、また大川という表記が見出される。



「江戸名所図会」に記された「千住川」の文字 遊行する帆掛け舟と帆をたたんで下流に向かう、上り下りの舟が描かれている。

【②用水関連】 用水関連施設の記述では冒頭に「樋」が登場する。堤防内の水系と堤防外の河川をつなぐ勾樋（いりひ）とも称される水門のこゝと考えられる。それが七か所あるとしている。

続けて東掃部堀と西掃部堀の流路についての記述がある。興味深いのは当時の地元での小地名が記されていることである。



千住五丁目新宮（左下） 高田家絵図



描かれた千本松 高田家絵図

■千本松 江戸時代の千住の名木だったのが「千本松」である。資料上の初見は、宝暦元（一七五一）年に秋田藩士清水秋全が藩主に献上した街道図である「増補行程記」（盛岡市中央公民館蔵）である。同図の千住付近に記述があり「千本松と申有之候。本木一本ニて枝葉盛也。枝

地元より箒のことく見へて候。畑中也。二丁余入て」としている。その後も千住宿の名勝であつたらしく、いくつかの絵図で確認できる。街道から2丁（町）余二一八mプラス入つたところにあつた、としており、絵図の道筋や水路等と対照すると、おおむね千住警察署と常磐線・東武線の大踏み切り付近になる。

しかし千本松はいつのころか失われたらしい。上に掲げた絵図の千本松のやや西側を南北（上下）に走る道が、おおむね北千住駅西側を千住警察署に向かう道に該当する。当時の小地名は「大道」である。

■五丁目新宮前 荒川開削以前に川田耕地にあつた千住五丁目のお宮、現在の千住大川町にある氷川神社の移転前の様子を描いている。本資料

では「五丁目新宮前」と記されており他の千住の絵図でも「五丁目新宮」としている。なお「五丁目」と「五丁目」の「町」と「丁」は江戸期には両方利用され、同じ意味で用いられている。

郷土博物館学芸員

(つづく)



「繕い」をする勝村氏

日本の工芸技術を啓発・普及する鷹峯フオーラム参加事業「伝統と保存の技術」、表具師・勝村真光氏には、展覧会で披露しました紙本六曲一双「吉野山桜竜田川紅葉図屏風」の修復課程を御説明いただきました。

伝統と保存の技術 II

表具師 勝村真光

表具師、勝村真光氏は、大正六年から続く表具師の三代目で現在父の英世氏と千住仲町で仕事をしている。地元に関わる美術資料についての知識と、取り扱いの経験が深く、郷土博物館でも多くの資料修復を依頼している。

紙本「吉野山桜竜田川紅葉図屏風」は、建部巢光の作品で、二百年ほど前のもので長年の間に傷みもあり、

今後、百年以上の保存に耐えうるように、屏風の本体からの全面修復となった。

【本紙部分の修復】

■**塗椽はずしと作品面の離剥** 屏風面の椽（ふち）をはずし、作品の描かれている面だけをとりはずす。

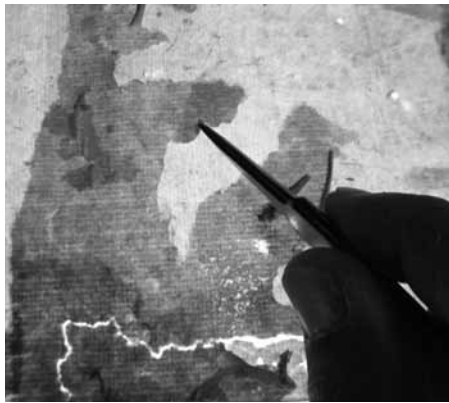
■**袋紙・増し裏打ち紙除去** 作品（本紙）の裏に貼られている袋紙と二層になった増し裏打ち紙をはがす。

■**肌裏紙の除去** 加湿し、撫刷毛で伸ばしたあと、本紙（作品）の裏に最初に裏打ちされている肌裏紙を取り除き、完全に本紙のみにする。

■**つくろい** 本画のヤブレや虫食い穴などを、紙質の似た紙を繕紙（つくろいがみ）として補填する。

■**肌裏打ち** つくろいが終了したあと、新しく肌裏紙を貼る。

■**剥落止め** 後の洗浄作業に備え、水（にかわすい）を使い、剥落（はくらく）の恐れのある部分にのみ剥



肌裏紙の除去

落止めをする。膠は、動物の骨や皮などを煮詰めて得たゼラチン質のもので、接着剤として使用するもの。

■**洗浄** エタノール、高純度精度水などを使い全体を洗う。

■**敷き干し** 吸湿性のある紙の上に置いて自然乾燥させる。

■**増し裏打ち** 肌裏打ちのあと、補強のための紙を裏打ちする。

■**仮張り** 増し裏打ちを済ませた本紙を仮張とよばれる道具にしばらく張り、乾燥させながら全体の調整を行う。

■**中裏打** さらにもう一枚紙を裏打ちする。

■**仮張り** 仮張りし乾燥

■**剥落留め** 屏風への張り込み作業に備え、色彩部分すべてを膠水によって止める。

■**使用材料** 使用する紙はいずれも手漉き楮紙である。



膠水による剥離止め

■**肌裏打**：薄美濃紙（岐阜県美濃後藤製）、**増し裏打**：文化美栖紙（奈良県吉野）、**中裏打**：薄美濃紙（加納製）

絵が描かれている紙は、江戸時代に輸入された唐紙（竹紙）と断定でき、繕紙は、竹紙（中国福建省）を用いる。ただし、画の部分については、以前の繕紙を使った。

糊として使用するのは、生麩糊（しょうふのり）である。これは小麦粉に水と塩を加え分離させてグルテンを除去した澱粉に水を足して煮糊としたもので伝統的な接着剤である。

【本体部分の調整・下張り】

前骨は、数が少なく木の厚みも薄く全体的に弱かったこともあり、新調し、本紙と併せて屏風全体の保存をはかることにした。

■**骨縛り** 骨格がゆがまないように丈夫な細川紙を使って張る。

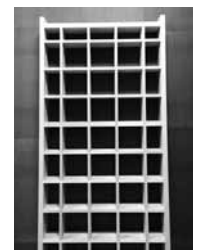
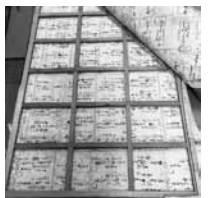
■**ベタ張り** 全面に糊をつけて楮紙を貼り、骨のくると骨縛りの耐久性を増す。

■**二編糞張り** 天（上）・地（下）双方から紙をずらしながら糊は、框（かまち）部分しかつけずに貼るので、中では紙が浮くようになる。これを二編行った。

■**糞押さえ** 紙全面に糊をつけてしっかりと張る。

■**削り付け** 下張りした骨を揃えて作品の大きさに合わせ、カンナで

削って調整する。



右上 前骨の様子
右下 新しい骨躯体
上 糞張り

■**蝶番組** 六曲分の骨を強靱な紙を使ってつなぎ合わせ、表と裏面からベタ張りで羽包みをおこなう。

■**袋貼り（上・下）** 半紙大の紙を四分一位だけ糊をつけて継ぎ貼っていく。継ぎ目を一寸程度重ねることにより、表面は浮いた状態となる。

■**清張り** 全体に糊付けして張る。

■**上張り・仕上げ**

■**本紙張り付け** 「作品」を貼る。

■**裏張り** 屏風の裏に絹地を張る。

■**裂地張り** 小縁・大縁に布地を張る。

■**椽打ち** 屏風の外周を囲む椽をつける。

■**オゼ張り** 屏風の番（つがい）部分に、江戸時代の金箔を貼った紙を貼る。

■**金具打ち込み** 江戸時代後半に作られた銚金具を打ち込む。